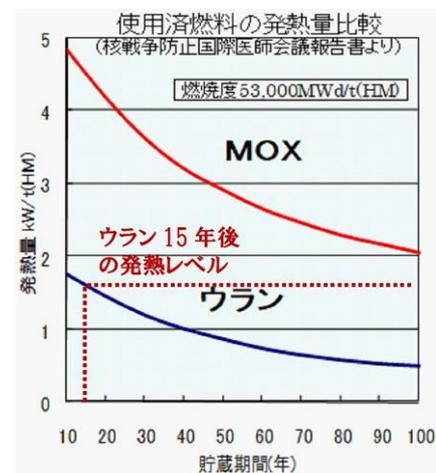
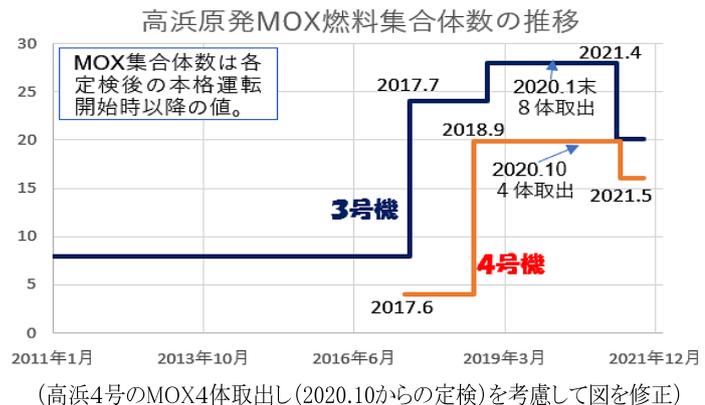


## 高浜原発MOX燃料がフランスから11月後半に到着予定 行き場のない使用済MOXをこれ以上増やすな

関電は、高浜原発3・4号機に装荷するMOX燃料の危険な輸送を開始し、11月後半に到着する予定だ。2020年11月10日(日本時間)から32体の製造を始めていたが、そのうち「製造が完了した燃料の輸送を開始」(8月4日関電)し、9月9日にシェルブール港を出発。実際に何体輸送したかは到着後にしか公表しないが、これまでの実績では1回に16体が輸送されている。

高浜3・4号機のMOX燃料装荷の状況は下図が示すようにけっして順調ではなかった。福島事故、差止判決及び蒸気発生器細管の引き続き損傷の影響を受けたためである。計画通りなら3サイクル目には、8体+16体+16体=40体となるどころ、最大28体にしかになっていない。高浜3号で最初に装荷した8体の取り出し開始まで、通常なら3年9か月ですむところ、2020年1月末まで丸9年間もかかっている。

取り出された使用済MOX燃料は敷地内のプールで100年以上冷却するしかない。使用済ウラン燃料は15年間プールで冷やしたあと乾式キャスクに入れて貯蔵所に運ぶことができる。ところがMOXの発熱レベルは右図が示すように、炉内から取り出して100年後でもまだウランの15年レベルまで下がらない。2019年6月21日の政府交渉で資源エネルギー庁の担当者は、使用済MOX燃料は冷却に300年かかると明言した。このことを、同年8月23日に高浜町の担当者に伝えたところ、たいへん驚き、そのことは知らなかった、関電と国に確認するとのことだった。「使用済MOX燃料の処理方法は、今後国の検討が出てから町として検討する」と述べたが、国の検討結果などでいていないし、でる見込みもない。



使用済MOX燃料は本来、高速炉サイクルの第2再処理工場に運ぶことになっていたが、もんじゅがつぶれて高速炉サイクルへのルートが資源エネルギー庁のサイクル図からも消えている。このような状況でプルサーマルを継続すれば、排出される使用済MOX燃料は敷地内プールで、原発が廃炉になったずっと後までも保管するしかなく、子々孫々にたいへんに危険な負の遺産を残すことになる。すでに高浜原発プールには行き場のない8体の使用済MOX燃料がある。少なくとも国の検討結果を待つ間、高浜町はプルサーマルを凍結する意向を鮮明にすべきである。

今回運ばれてくるMOX燃料は、柏崎刈羽原発で刈羽村の住民投票結果を受けてプルサーマルを凍結したように、炉内に装荷せずそのまま保管すべきである。さらに、このような状況で六ヶ所再処理工場を動かせば余剰プルトニウムが産出する。プルサーマルが行き詰っている実態を踏まえ、六ヶ所再処理を止めていこう。